

SOMETHIN' ELSE

CANNONBALL
ADDERLEY
MILES DAVIS
HANK JONES
SAM JONES
ART BLAKEY
BLUE NOTE 1595

MILES DAVIS PERFORMS BY COURTESY OF COLUMBIA RECORDS

SIDE 1

AUTUMN LEAVES

(Prevert-Kosma) 枯葉 10'57"

Miles Davis:trumpet
Cannonball Adderley:alto sax
Hank Jones:piano
Sam Jones:bass
Art Blakey:drums

Recorded March 9, 1958

CANNONBALL ADDERLEY•HERBIE HANCOCK

SIDE 2

MAIDEN VOYAGE

(Herbie Hancock) 処女航海 7'56"

THE EYE OF THE HURRICANE

(Herbie Hancock) ジ・アイ・オブ・ザ・ハリケーン 5'59"

Freddie Hubbard:trumpet
George Coleman:tenor sax
Herbie Hancock:piano
Ron Carter:bass
Anthony Williams:drums

Recorded May 17, 1965



制作にあたって

日頃、第一家庭電器をご愛顧いただきまして誠にありがとうございます。

皆様にささえられて、「マニアを追い越せ大作戦」カートリッジ頒布会も10周年を迎える事が出来ました。

10周年の感謝の気持ちをこめて今回はそれに相応しい企画と言う事で、モダン・ジャズ・レーベルの老舗で名ミキサー、ルディ・ヴァン・ゲルダー・サウンドで定評のある《ブルーノート》より名盤中の名盤を2枚えらび、マスター・テープの音を忠実に45回転盤で再現しました。

今年創立45周年をむかえた《ブルーノート》はジャズ・レーベルの中でも録音の良さと、歴史的な名盤で他にならぶレーベルがないと言えるほどの名門であります。

その数ある名盤の中からベスト・ワンと言える一枚、キャノンボールとマイルス共演の「サムシン・エルス」の中より史上屈指の名演と言われている「枯葉」をSIDE 1に、そしてSIDE 2には今年グラミー賞を受賞した人気キーボード奏者、ハービー・ハンコックがブルーノートにのこした最高傑作「処女航海」の中よりメインテーマの「処女航海」と、のちにV S O P最大のレパトリーとなった名曲「ジ・アイ・オブ・ザ・ハリケーン」を選曲しました。

SIDE 1の「枯葉」の原曲はシャンソンで世界的にヒットした名曲ですが、マイルスのミュート・ホーンの名演は録音もすばらしく、音色・音質ともにチェックにも最適なもので興味がつきません。又この「枯葉」の録音は1958年でステレオ録音開始2年目とは思えない素晴らしいもので、ヴァン・ゲルダー独特のオンマイクで録音されており、新鮮で生々としたものですが、ラッカー盤にカットングをして見ますと、アート・ブレイキーのビョウ打ちシンバル（シンバルに数個の穴をあけ、ビョウがついている特殊なもの）の高域成分が異常に高い為、カットング・レベルを上げることがマスター・テープのバランスのままでは出来ません。イコライザーを通したり、高域にリミッターをかけて、カットング・レベルを上げてみましたが、マスター・テープの新鮮さが失われ、雰囲気が悪くなる為、今回はカットング・レベルを多少下げて、マスター・テープのバランスそのまま、ストレート・カットングしました。その結果、マスター・テープの新鮮で熱気あふれる名演を忠実に再現出来たと思います。

（尚アート・ブレイキーのビョウ打ちシンバルは、カートリッジのトレース能力やアームの調整不良がありますと歪む場合もございます。）

SIDE 2の「処女航海」と「ジ・アイ・オブ・ザ・ハリケーン」は、フレディ・ハバード以外は'63年のマイルス・デイヴィス・クインテットが結成されたばかりのフレッシュなメンバーで、意欲的で熱気あふれる演奏を聴かせてくれます。

特にトニー・ウィリアムスの驚異的なパワーフルなドラミングやフレディ・ハバードの力強くエネルギッシュなトランペット・ソロなど、中域のチェックには最適な演奏を聴かせてくれます。

又、現在のフュージョンと異なり、全楽器アコースティックですので、ハービー・ハンコックのピアノを始め、ロン・カーターのベースなど響の美しい新鮮なサウンドが聴きどころです。

SIDE 1同様、ルディ・ヴァン・ゲルダーのミキシングを重視して、マスター・テープそのままの音を、ストレート・カットングしました。カットング・マシンはウエストレックスとノイマンを比較した結果、ノイマンでカットングしたものがマスター・テープに忠実であるとの結論を出し、ノイマンのVM S80でカットングしました。

毎回、東芝EMI(株)・同関係スタッフ各位には多大な御協力をいただきてきましたが、今回の10周年記念盤制作では、なお一層の御協力をいただき厚くお礼申し上げます。

又、今回のジャズ史上屈指の名盤「サムシン・エルス」と「処女航海」より3曲を使用しておりますが、「サムシン・エルス」は'84年12月に、又「処女航海」は'85年1月にそれぞれ東芝EMIより発売になりますので、御購入下さって全曲お聴きいただくと更に素晴らしさが味わっていただけると思います。

今後もDAMとしましては、ソフトの提供・企画に努力してまいりますので、今後とも御支援のほど、よろしくお申し上げます。

〈DAM推進委員会〉



1 マイルス・デイヴィス



2 キャノンボール・アダレイ

SIDE 1

★マイルス・デイヴィスをフィーチャーしたハード・バップの名演

モダン・ジャズのエッセンスに触れたいと思うとき、これに勝る演奏はちょっとみつかるまい。

ジャズの第一の黄金時代が1930年代後半のスィング時代なら、第二の黄金時代は1950年代から'60年代のはじめにかけてのハード・バップ（'40年代のバップをより強化した演奏）エイジであろう。

この時代には幾多の名盤が生れたが、「サムシン・エルス」もそのひとつである。

「サムシン・エルス」とは普通と違うもの、特別なもの、素晴らしいものといった意味である。まさにそのとおりの特別な素晴らしさをもった演奏である。

録音されたのは1958年の3月9日、ハード・バップ期の真ただ中である。

リーダーは今なきアルト・サクスのキャノンボール・アダレイとなっているが、実際のリーダーはマイルス・デイヴィスである。ただ契約の関係でマイルスをリーダーに立てることが出来なかったということである。

過日このセッションに加わっているピアノのハंक・ジョーンズに会ったので、「サムシン・エルス」のことを聞いてみると、「あれはマイルスがどんでんやり方を決めて録音したし、実際のリーダーはマイルスでしたよ。曲も彼が選んでもってきたし、ほとんど唯一回の演奏でオーケーになりましたが、マイルスのプレイはアイディアが泉のごとく湧き出してきて、みんな圧倒されたものでした。レコーディングでこんなに楽しくスリルのある経験をしたのははじめてでした」という答えが返ってきた。演奏したミュージシャンがこんなに興奮したのだから聴く方だって同じだろう。

マイルスに加わると、どんなレコーディング・セッションも引き締まるから不思議なものである。参加者を鼓舞し、刺激し、緊張させる不思議な力を持っているのである。

太った見るからにエネルギーにあふれたキャノンボールは、普通自分がリーダーになったレコードではソウルフルなのはいいが、すこしやりすぎて奥味の出ることもあるのだが、どういうわけかマイルス・デイヴィスのコンボの一員としてプレイしたものは自己抑制が利いていて、すっきりした知的な表現がみられるのである。この「サムシン・エルス」もマイルスとの共演なので、キャノンボールのいい面が出ているのである。

マイルスといえば、ジャズ界最大の巨人で、1940年代以降つねにジャズ界をリードする働きをみせてきた。'40年代末から'50年代のはじめにかけてのクールなプレイ、そして'50年代中期の

ハード・バップ、つづくモード手法の演奏、'70年代に入ってはジャズ・フュージョンのプレイでも多くの人を引っ張ってきた。しかし'75年から6年近く身体を悪くして休養したが、'81年に奇跡のカムバックを果たし、'81年、'83年に来日した。最近では電気トランペットも吹かず、やや'50年代を思わせるオーソドックスなプレイにもどってきている。「サムシン・エルス」はそういったわけで、マイルスの原点ともいべき演奏なのである。

キャノンボールはファンキーやソウル・ジャズの代表ともいべきアルト奏者だが、1955年にこの年亡くなった天才アルト、チャーリー・パーカーと入れ換るかのように姿を現わしたフロリダ出身の黒人である。

「サムシン・エルス」がマイルスとの初共演吹き込みで、これ以後マイルスのグループに加わって数枚のLPを録音して株を上げた。

参加ドラマーがアート・ブレイキーというのも興味深い。彼は1955年にジャズ・メッセンジャーズを結成し、今日までこの名のグループをひきいて第一線で活躍しているが、ハード・バップを推進してきた一人でもある。この時代のマイルスにはびつりのドラマーともいえる。

さて、吹き込みメンバーの詳細はつぎのとおりである。
マイルス・デイヴィス（トランペット）
ジュリアン・キャノンボール・アダレイ（アルト・サクス）
ハंक・ジョーンズ（ピアノ）
サム・ジョーンズ（ベース）
アート・ブレイキー（ドラムス）

また、このセッションは演奏曲も興味深い。このアルバムを高名にし、かつ魅力的にしているのは、じつは「枯葉」が演奏されているからなのだ。原曲はもちろんシャンソンだが、今日ではジャズのスタンダード・ナンバーとして、アメリカでも日本でもよく演奏されるし、日本のジャズ・クラブでのリクエストではつねにベスト・テンに入るといえる。

「枯葉」をジャズで演奏する場合、このマイルスのやり方がひとつの手本となっているのである。「枯葉」の演奏を有名にしたのはマイルスであり、それは、この「サムシン・エルス」の中のプレイなのである。ほかにもウィントン・ケリーが演奏したものもあるが、やはり決定版はマイルスの演奏だろう。

臨時編成のコンボとは思えぬままとまりのあるサウンドの中で全員がのびのびと自由な即興演奏（アドリブ）を展開しているところを聴きとってほしい。（ZR23-1069より転載）

〔解説／岩浪洋三〕



6 フレディ・ハバード



7 ジョージ・コールマン



8



3 ハンク・ジョーンズ



4 サム・ジョーンズ



5 アート・ブレイキー

SIDE 2

★マイルス・スクールの優等生たちによるフレッシュなセッション

'60年代のジャズをおし進めたもっとも重要なミュージシャンは、ジョン・コルトレーンとマイルス・デイヴィスだった。ジョン・コルトレーンは、自身の肉体の限界に挑戦するかのよう激しい吹奏を繰り返して、フリー・ジャズのプレイヤー達にも大きな刺激を与えている。いっぽうマイルス・デイヴィスは、知的でモータルなプレイを聞かせるいっぽう、その次の世代を担う優れた人材を積極的にグループに起用して、常に時代をリードしてゆく音楽を演奏し続けた。「処女航海」と名付けられたこのアルバムは、当時のマイルス門下生によるフレッシュな作品である。トランペッターだけがマイルスに代って、フレディ・ハバードが参加している。フレディもまた、表現スタイルこそ違ってもマイルスを神様のように尊敬しているプレイヤーで、当時はそのパワフルな吹奏が注目を集めていた新進のミュージシャンだった。このセッションのメンバーは、いずれも当時の精鋭プレイヤーであると同時に、この次の時代、すなわち70年代のジャズ界の主流を担ってゆくひとびとばかりである。

'60年代はじめ（正確には'63年夏）に結成されたマイルス・デイヴィス・クインテットのメンバーは、マイルスの他にジョージ・コールマン、ハービー・ハンコック、ロン・カーター、トニー・ウィリアムス（すなわち本LPのメンバーとフレディ・ハバード以外は同じ）というものだった。彼等はニューヨークのジャズ・シーンにデビューを飾ってから、それほど日が経っていたわけではない。しかしハービー・ハンコックは既に「ウォーターゲート・マン」のヒットを放っており、トニー・ウィリアムスも従来のドラミングの枠にはまらない驚異的なパワーを秘めたプレイヤーが、あつという間にファンを捉えてしまっていた。またロン・カーターも、エリック・ドルフィーとの共演などを通じて、意欲的な姿勢が注目されていた頃である。彼等をサイドメンに従えたマイルス・クインテットは、それまでのサウンドから見事に脱け出して、一歩進んだ音楽を生み出すことに成功した。'64年になって、テナー・サクスがジョージ・コールマンからサム・リヴァースに代わり、ウェイン・ショーターがリヴァースのあとを引き継いで更にサウンドを発展させていったが、ハービー・ハンコック、ロン・カーター、トニー・ウィリアムスの3人は'60年代末から70年代はじめにかけてまでマイルス・グループにとどまって、各々が進むべき方向をしっかりと見定めていったのだ。

このセッションがおこなわれたのは、1965年3月17日のことである。ハービー・ハンコックはブルーノートで5枚目のリーダー作を録音するに当って、マイルス・グループでの仲間のロ

ンとトニーに声をかけ、かつての仲間だったジョージ・コールマンを呼び寄せた。（この時マイルス・グループのテナーはウェイン・ショーターに代っていた。）トランペッターに御大マイルスが使えるわけではないから、やはり当時親しく一緒にセッションを繰り返していたフレディ・ハバードを起用することにした。つまりマイルス・グループで得たものを、メンバーが彼等なりに消化して、自分達のオリジナルな表現として見事に打ち出してみせたのが、このアルバムの音楽なのである。ハービー・ハンコックは、このレコーディングをおこなうに当って、海をテーマにしたオリジナル作品を5曲書き下ろした。

「いままでも海はよく、芸術のあらゆる分野において、創造的な精神をもつ人たちの想像力を駆りたてたものだった。アトランティスとかサルガソ海という名前の響きにしても、伝説的な人魚の話にしても、それが民俗学的な神秘性と結びつく。まだまだたくさん例があるが、こうして海は人間の経験というものを豊富にしてきたのだ……」こんな風にハービーは言っている。しかしここでは必ずしもそういうことにこだわって聞く必要はない。そんな知識を得ていなくともこれらの演奏を耳にすれば彼等の豊かなイマジネーション、そして次の時代を指向するメンバー達の希望に満ちたサウンドが聞きとれるからだ。

なおこれらのメンバー達が中心になって、1976年にはV.S.O.P.クインテットが再編成された。V.S.O.P.クインテットのメンバーは、テナー・サクスがウェイン・ショーターになっているのは、本アルバムと同じである。そしてこのLPで演奏されている曲のいくつかは、そのままV.S.O.P.クインテットの主要レパートリーにもなった。やはりメンバー達にとって、この頃のプレイは彼等の原点とも呼べるものなのだろう。マイルス・スクールの優等生たちによる、フレッシュな覇気溢れるプレイを充分楽しんでいただきたい。

「処女航海」は、特徴的なリズム・パターンの反復が印象的なナンバーで、ハービーによれば、処女航海へ乗り出す船のキラキラする容姿、航海へのわくわくするような期待感といったものをイメージして作曲したのだという。モータルなプレイの中に、全員が'60年代ジャズの新しい方向を打ち出しているのが良くわかる演奏である。

「ジ・アイ・オブ・ザ・ハリケーン」は、スリリングな変化をもったテーマが印象的で、ソロの先陣を切るフレディのアドリブが素晴らしい。ゆったりとした感じのフレーズから始め、次第にエキサイティングな盛り上りをみせるフレディに刺激されるように、コールマン、そしてハンコック自身の熱のこもった好演を展開。トニー・ウィリアムスのバックキックも演奏を更に熱いものにしていく。（2R23-1080より転載）

【解説/岡崎正通】

オーディオ・チェック・ポイントについて

ブルーノートといえば、モダン・ジャズを語る時に忘れることのできないレーベルであり、また、ジャズの宝庫でもある。今回のDAMオリジナル・ディスクには、そのブルーノート・レーベルの名作中の名作と言うべき作品が収められている。

まず1曲目は、キャンノンボール・アダレイの「サムシン・エルス」に収められていた「枯葉」である。原曲は知らぬ人はいないシャンソン・ナンバーだが、このアルバムをはじめジャズの名演は数知れない。印象的なイントロに続いて、ミュートをかけたマイルス・デイヴィスのtpが淡々とメロディーを奏ではじめる。ミュート・トランペットのマイルドで物悲しい響きが、このディスクでは、さらに表情豊かに再現されるといっても良いだろう。タンギングの強弱、バルブの滑らかな動き、エコー成分のディスターションなどで再生装置の解像度がチェックできるはずだ。ドラムスはA.ブレイキーが担当しているが、A.ブレイキーというとドライブ感にあふれたパワフルなドラミングで知られている。しかし、ここでは終始ブラッシュワークに徹している。ブラッシングの擦過音やハイハット・シンバルの開閉が極めて生々しい。キャンノンボールの良く唱うアルトサクスク・ソロは独特の色気を感じさせる艶やかな響きだ。また、S.ジョーンズのベースもピチカート音が力強く、弦のきしみやブーミング感もクリアーに再現され、25年以上も前のディスクにここまで録音されていたことに改めて驚かされる。

SIDE 2の2曲目は、'60年代の新主流派ジャズの代表作であると同時に最高傑作といえるH.ハンコックの「処女航海」に収録されていたナンバーだ。'65年の録音であり、当時としては最も新しいスタイルであるだけにハード・バップ期の「枯葉」と対比させて聴くと音楽上のコンセプトやサウンドの違いが良く判る。

「処女航海」はH.ハンコックが語るところによると、処女航海へ乗り出す期待感をイメージして作曲したということだが、ゆったりとした一定のリズムパターンをのイントロが茫洋とした海原を連想させる。それに続くトランペッターとテナーサクスのメロディが静かに出航して行く船の姿を思わせる。

トランペッターがLch、テナーサクスがRch、ベースはセンターに定位しているの、ここでバランスと左右の接続のチェックが可能だ。一定のリズム・パターンを提示するR.カーターのベースとT.ウィリアムスのドラムが次第に、そして、微妙に変化して行くが、両者が様々なテクニクを駆使していることが良く判る。R.カーターのダブル・ストップ（重奏音）による重厚な響き、T.ウィリアムスのスポンティニアスでキメ細かなシンバルワークが聴きものだ。

「ジ・アイ・オブ・ザ・ハリケーン」は、いきなりスリリングなテーマで始まるが、そのスピード感が聴く者に適度なテンションを与える。F.ハバードは始めから熱を帯びた快演を聴かせるが、それをさらに盛り立てるT.ウィリアムスの尖鋭的なスネアドラムのショットやバスドラムのビートもクリアーだ。また、ドライブ感にあふれたR.カーターのベース・ランニングも改めて聴き直すと十分に低域まで伸びていることが判る。この辺りで、再生装置の低域の周波数レスポンスとダンピングの良し悪しが一目(聴)瞭然となるはずだ。また、後半になるとエキサイティングな演奏になっているので、針圧、インサイドフォースなどプレイヤー回りの調整は入念に行なう必要があるだろう。

このアルバムは、'50年代と'60年代のジャズの素晴らしさを存分に楽しめるだけでなく、ジャズ録音の名手として知られているルディ・ヴァン・ゲルダーの偉業に触れることができる貴重なものといえるだろう。

このアルバムは45回転、ハイ・レベル・カッティングということから、前述のような聴きどころが、さらに明晰に再現されるといえるだろう。

まず、このアルバムに針を降して驚かされたのはSN比の良さだ。僕のオリジナル盤と比べるとスクラッチ・ノイズが格段に減っている。また、周波数レスポンスも向上し、ハイエンド、ローエンドともに1オクターブは伸びているのではと思えるのである。それと厚手プレス威力でもあるのだろうか、低音楽器の音像に十分なマッスがありながらも輪郭を少しも曖昧にせずクッキリと描き出し、どんなピークでも安定感と実在感に満ちた再生音が得られるのだ。さらに、シンバルやスネアドラム、ピアノの打弦音などバルブ系音の立ち上りもいたってスムーズで、とても20年以上も前の録音とは思えない。そして、何よりも嬉しいのはそうした物理特性の向上によって全帯域の密度や情報量が増し、熱気のある当時のジャズの息吹がこれまで以上に生々しく蘇ったことだ。幾度となく聴いたジャズの名曲なのに、まだ聴き逃していた音やアーティストの表現方法、表情があったのだということを知らされた。

ジャズの素晴らしさ、オーディオの面白さを体験できるアルバムと断言しても良いだろう。

【小林 貢】

ハービー・ハンコック



9 ロン・カーター



10 アンソニー(トニー)・ウィリアムス



3,4,7,9,10写真提供:スイングジャーナル

■ DAMハイクオリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩で、ビデオ・ディスク及びコンパクト・ディスク(CD)の開発技術によって得られた製盤の技術とノウハウを最大限に駆使し、従来のマスプロ的仕様とは性格の異なる、手作的なプロセスを経て制作されたものが今回のDAMレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシーとしている意図を理解していただいていることと思います。

そこで今回のハイクオリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグループガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなっており、これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa) グループガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b) ピックアップを下す時ヘタをすると、針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。c) ピックアップによっては、カートリッジの底がグループガードに接触することもあります。d) 音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード固有共振を起こしやすい状態にあると云えます。

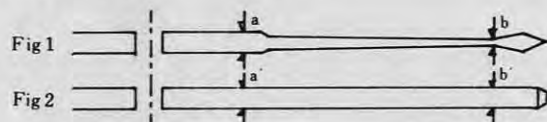


Fig 1 一般のレコード a-b=0.6[mm]

Fig 2 新フラットレコード(ディスク) a'-b'=0.2[mm]

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を烈振させ、レコードの固有共振によって音質への影響が十分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの固有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、その

ナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状、質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

一般レコードとの比較

| | |
|---------|-------|
| 重量比 | 30%up |
| 厚さ比 最厚部 | 15%up |
| 最薄部 | 65%up |

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限ガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

■ クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の“DAM45”では、高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクォリティーを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P)250μ~280μ、[L-R]、ピーク・レベル+20dB程度のは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かすかずのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレーシングはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要と

されますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティの良いダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ませんが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱下さい。

(2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転に比べて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。

(3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃~20℃位に保って下さい。

(4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

(5)このレコードは、ハイクオリティのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用

●カッティング・データ

Cutting: TOSHIBA-EMI Cutting Room

Cutting Date: April 19, 1984

Tape Recorder: Studer A-80 MK II

Drive Amp.: Neumann SAL-74

Cutting Lathe: Neumann VMS-80

Cutting Head: Neumann SX-74

Diamond Cutting Stylus

Non Limiter

Non Equalizer

Cutting Engineer: S. Takeuchi

Sound Engineer: Y. Watanabe

Recorded: March 9, 1958(Side 1)

May 17, 1965(Side 2)

企画: 第一家庭電器株式会社

製造: 東芝EMI株式会社